# 英バーティカル社の空飛ぶタクシー、運用費ヘリの3割

## CEOが表明、大阪万博でデモ飛行

2022/12/12 22:00 | 日本経済新聞　電子版

ファンボロー国際航空ショーで展示された「VX4」の実物大模型（7月、英南部）

【ロンドン=佐竹実】「空飛ぶタクシー」と呼ばれる電動垂直離着陸機（eVTOL）を開発する英バーティカル・エアロスペースは、運用費がヘリコプターの3割程度になるとの見通しを示した。2025年の大阪万博でデモンストレーション飛行をし、早期の実用化を目指す。救急医療サービスでも活用する考えだ。

創業者のステファン・フィッツパトリック最高経営責任者（CEO）が日本経済新聞の取材に応じた。同社が開発している「VX4」は乗客4人乗りで、最高時速は約325キロメートルに達する。空港や都心のほか、離島などをつなぐ新たな交通手段として期待されており、世界の航空会社などから受注している。

日本では丸紅と提携して市場を開拓している。同氏は日本について「人口密度が高い上に大きな都市があり、世界でも最も重要な市場の一つだ」と述べた。ヘリコプターを使うような富裕層に限らず、ビジネスマンなど幅広く想定している。運航会社が最終的に運賃を決めるが、現時点の試算では成田から都心まで1人当たり1万円程度になる可能性があるという。

フィッツパトリック氏は「ヘリコプターよりも100倍静かで、100倍安全だ」と述べた。ヘリコプターは複雑な機械システムを持つため維持費が高い上に操縦も難しい。一方のeVTOLは部品が少ないことなどから運用費はヘリの3割程度に抑えられるという。同氏は「欧州の規制当局は大型航空機と同様の安全性を我々に求めている。これは10億時間の飛行で故障が1回以下であることを意味する」と話した。

インタビューに応じるフィッツパトリック氏（11月、ロンドン）

同社は欧州などで型式認証を申請しており、25年以降に当局の認可を経て実用化する計画だ。英国ではすでにテスト飛行を実施した。日本航空（JAL）やアメリカン航空など世界の航空会社から予約も含めて約1400機を受注している。世界各地で機体製造やメンテナンスも展開するという。

eVTOLは世界の航空大手やスタートアップが開発を競っている。フィッツパトリック氏はVX4について、米大手のハネウェルの航空システムや、英ロールス・ロイスのパワートレーン（動力装置）を採用していると説明。「我々は運航会社ではなく、電動の機体を作ることに集中している」と他社との違いを説明した。

商業目的以外では、「ドクターヘリ」にかわる社会インフラになる可能性がある。バーティカル社は、航空医療サービスを展開する英バブコック・インターナショナルと共同部会を立ち上げ、けが人や病人の救急搬送にVX4を活用する方法を検討している。道路が渋滞している場合でも、着陸するスペースがあれば迅速に患者を運べる可能性がある。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.